

日常会話における独り言から生じる連鎖環境の検討

傳研究室 17L1084A 櫻井亮太

1. 背景と研究の目的

私たちが日常生活を送る中で、独り言を発する場面は度々ある。例えば、荷物を持ち上げるときの「よいしょ。」や、目の前の食事を見たときの「美味しそう。」という発話が挙げられる。そして、これらの独り言には、発した後の話の展開の有無などにより、いくつかの種類があり、それぞれに特有の特徴があると考えられる。

先行研究で用いられた課題指向対話は日常場面と乖離があるため、本研究では、日常会話を分析対象とし、会話環境に独り言の契機が多数存在する場面を扱った。その日常会話において、場面や話者、品詞など様々な角度から分析を行い、独り言が構成する連鎖組織や連鎖組織を構成しない独り言の特徴を明らかにすることを目的とする。

2. データとアノテーション

2.1 会話データ

コーパス: 『日本語日常会話コーパス』(モニター公開版)

←性別や年齢などを考慮して選出された協力者 20 名 (延べ会話参加者 392 名) が
食事中の雑談など日常生活における会話を自身で撮影、録音したもの。

場面:

【テレビ場面】 父・母・姉・弟の 4 人が食事中にテレビを見ながら雑談している様子

【昼食場面】 母と息子 3 人の 4 人が昼食中に雑談している様子 (テレビなし)

【ドライブ場面】 父・母・息子 2 人・祖母の 5 人が車で移動中に雑談している様子

2.2 独り言の定義

複数人いる場面において、他者への言及をせず、呼びかけや視線によって相手を特定しない発話で、会話途中の相槌や合いの手を除いたもの。

2.3 独り言の分類

【非展開型】 発話後、他の参加者からその発話に対して言及されない。

【追従型】 発話後、他の参加者からも類似した発話が行われる。

(1 発話目を追従 L、2 発話目以降を追従 F と分類した。)

【展開型】 発話後、その発話が言及され、その後の会話が展開される。

【短応答型】 発話後、その発話について言及されるが、その後の連鎖組織が
1、2 ターンという短い長さで終わる。

3. 分析 1（独り言発話全体の特徴）

3.1 目的

テレビ場面、昼食場面、ドライブ場面の3つの場面において、発話全体を通した独り言の特徴を明らかにする。

3.2 方法

まず、アノテーションソフト ELAN を用いて、会話データを見聞きし、独り言を4種類のタイプに分類した。次に、分類した独り言について、声の大きさや発話の長さ、発話した背景などの特徴についてまとめた。

3.3 結果と考察

非展開型の独り言は、声が小さい、他者の発話と重なる、「あー。」のような1語の感動詞が多いという特徴が見られた。声の小ささや発話の重なりによって、他者に発話が届きにくくなっていることや咄嗟に出てきた感動詞の発話自体にあまり意味がなく、他の参加者から取るに足らないものとして判断されていると考えられる。

追従型の独り言は、評価を伴う傾向があり、テレビ場面に映る人物を見て「可愛い」「かっこいい。」のように追従して発話されることがあった。これは、共同注視したものに対して、先行した評価に釣られて、他の参加者も自身の評価を行いやすくなったからだと考えられる。

展開型の独り言は、発話内に注目されやすい複合語や対象物が存在しやすい傾向にあった。参加者間であまり知らない言葉については、それぞれ各個人の知識や経験から感想を述べることもあるので、話題化して話が展開されやすいと考えられる。

短応答型の独り言は、発話時の事実や状況を淡々と述べるが多かった。テレビを見て選手の順位など自身の感想を含めずに単に事実や状況を述べることで、他の参加者から言及されるものの、そこからの会話は広がりにくくなったのだと考えられる。

4. 分析 2（発話の先頭・末尾の品詞）

4.1 目的

分析 1 では、発話全体の特徴を明らかにしたため、分析 2 ではより細かく分析するために、各場面における発話の先頭と末尾の品詞に注目することで、品詞情報から独り言としての性質や分類による特徴を明らかにする。

4.2 方法

分析 1 と同じテレビ場面、昼食場面、ドライブ場面の3場面において、発話の先頭と末尾の品詞情報を基に集計して分析を行った。その際、独り言から生じる連鎖組織に着目するため、これ以降の分析では追従 F を除いて集計した。

4.3 結果と考察

図1から図3は、各場面における会話全体に対する独り言発話の先頭の品詞の割合を集計したもので、図4から図6は、各場面における会話全体に対する独り言発話の末尾の品詞の割合を集計したものである。発話の先頭と末尾に共通して見られた特徴として、テレビ場面における追従型の独り言は、形容詞が含まれる割合が一番高かったということが挙げられる。これは、テレビを見て「やばい。」というような1語の発話や「すげえ すげえ すげえ。」のように興奮して同じ単語を繰り返す発話が多くなり、結果的に発話の先頭も末尾も形容詞となり、どちらについても割合が高くなったのだと考えられる。

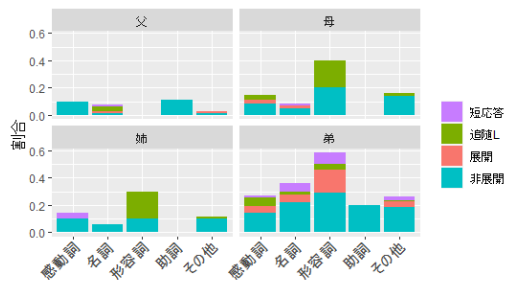


図1 テレビ場面の会話全体に対する独り言の先頭の品詞の割合

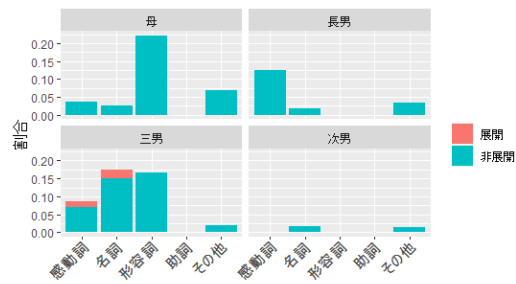


図2 昼食場面の会話全体に対する独り言の先頭の品詞の割合

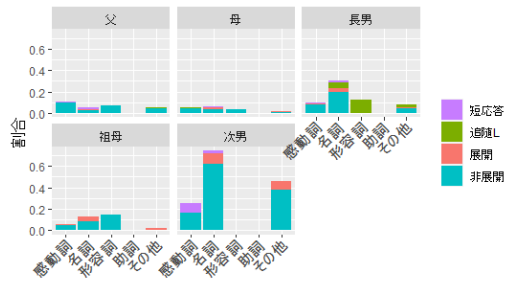


図3 ドライブ場面の会話全体に対する独り言の先頭の品詞の割合

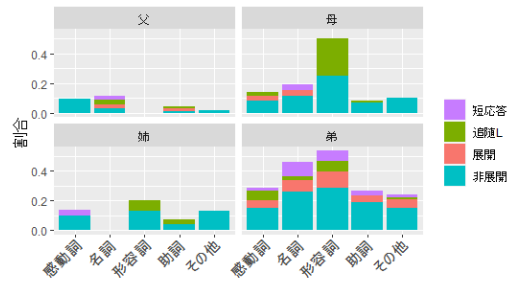


図4 テレビ場面の会話全体に対する独り言の末尾の品詞の割合

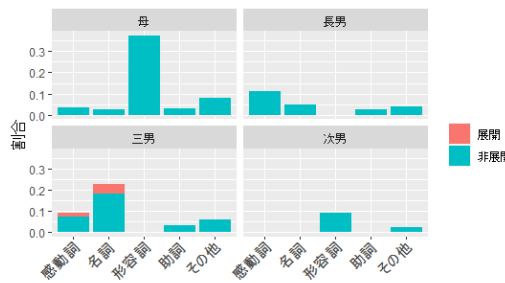


図5 昼食場面の会話全体に対する独り言の末尾の品詞の割合

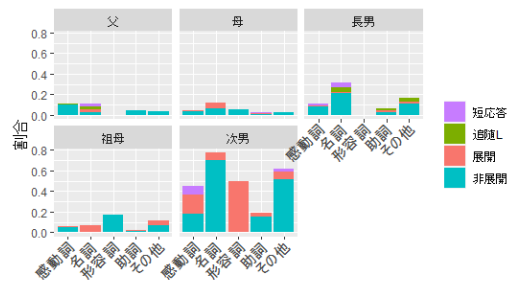


図6 ドライブ場面の会話全体に対する独り言の末尾の品詞の割合

5. 分析 3（発話の語数と品詞の組み合わせ）

5.1 目的

今までの分析から独り言は短い発話が多い傾向にあると分かったため、分析 3 では、より詳しく発話の語数とそのときに見られる品詞の組み合わせとの関係について明らかにする。

5.2 方法

単語ごとに語数と品詞がまとめられた表を用いて、語数ごとにどのような品詞が用いられているのか、その組み合わせと共に集計した。

5.3 結果と考察

語数と各タイプの独り言が占める割合を示したものが図 7 である。この図から場面によって異なる特徴を持つことが分かった。テレビ場面について言及すると、2 語の発話において全タイプの独り言が含まれる割合が高くなっている。表 1 の品詞の組み合わせから、特に展開型の名詞一名詞の組み合わせが多く見られた。これは、「日本／人。」「零／五。」というような発話で、端的に情報を示しているが、参与者間に共通して陸上に関する知識があるため、話が展開した。その次に多く見られたのが非展開型の名詞一助詞の組み合わせである。「足／が。」というように述語の省略された発話が見られ、文としての不完全さから言及されないのだと考えられる。

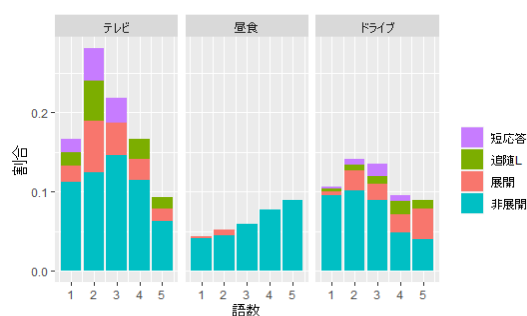


図 7 発話の語数について、会話全体のうち、独り言が占める割合

表 1 テレビ場面における 2 語の独り言の品詞の組み合わせ

	1番目	2番目	タイプ	個数	合計
1位	名詞	名詞	非展開	1	8
			追随L	1	
			展開	4	
			短応答	2	
2位	名詞	助詞	非展開	3	5
			追随L	1	
			展開	1	

6. 総合考察と展望

日常会話で生じる 4 種類の独り言はそれぞれに異なる役割や特徴が存在していた。連鎖組織が構成されない非展開型の独り言は、声の小ささや発話の重なりなど非言語的要因による影響が強く、非展開型特有の特徴であると考えられる。連鎖組織が構成される追随型、展開型、短応答型の独り言は、発話内容に特徴があり、それぞれ形容詞が用いられる評価を伴う発話や展開する契機となる複合語の存在、単に事実や状況を述べるなど言語的要因が特徴的である。また、発話の語数や品詞についても分析を行った。これは、場面による違いが大きく、昼食場面で見られた会話の活発さやテレビ場面とドライブ場面で見られた変化する対象物の存在などが影響している。

今後は、他場面の分析や同じ場面のデータを複数見て、場面に一貫した特徴を探し出すことや、話者の違いによる独り言発話の特徴についても調べる必要がある。